

第七章 爆炎の罟

かりんと浩一が地下一階へとつづく階段にさしかかったとき、上の方から、まるで断末魔のような横井のそれが聞こえてきた。ふたりとも、思わず立ち止まって上方を振り仰ぐ。

「どうやら、うまくいったみたいね」

「ああ……」

「やっぱり、心配だった？」

「あたりまえだろ」

「でも、ちいちゃんは一度言いだしたら聞かないような性格、あるし……」

「なに言ってるんだよ、おれが心配してたのは相原先生のほう！」

「あーっ、浩ちゃん素直じゃない！」

「うるせえ！」

階段を下りきり、地下運動場への連絡用大型エレベーターに向かって、まっすぐに歩いていく浩一の後を追いながら、かりんが言う。

「だめじゃない、世界にたった一人つきりしかいないお姉さんなんだから、もっと大切にしてあげなきゃ……」

浩一は、エレベーター前で歩みを止め、かりんをふり返って訊く。

「じゃあ、相原先生はどうなってもよかったっていつのか？」

「なっ、そんなこと言っていないでしょ！ わたしはただ……」

うまく自分の気持ちを表現できず、言葉に詰まってしまふ。

「……わかってる」

浩一は、ひとことつぶやくように言い、ポケットから瑠璃色のバンダナを取り出した。

「腕、見せて」

「あ……」

浩一は、かりんの腕を取り、制服の袖の破れ目から、あらためて上腕部の傷を確認し、そこに帯状に折ったバンダナを巻きつけた。

「ありがとう……」

バンドナの結び目を見ながら、ちょっと照れたようにかりんが言う。

地下運動場へとつづくエレベーターの傍らに立ち、そんなやりとりをしていたふたりの前に、いきなり姿を現した者がいた。南方である。

「紺野さん、紺野さん、例のもの、見つかりました？ いま持ってますか？」

「み、南方……なんで、ここに？」

浩一は、海の中で松茸でも見つけたかのような表情で、目の前の南方を見つめている。

そんな浩一を目にした南方は、あわててかりんをふりむき、確認をとった。

「琴宮さん、私たちのこと何も話されてないんですか？」

「う、うん。そんなひまなかつたし……」

そう答えたかりんに、南方はそれ以上にも言わず、浩一に向きなおって早口で説明しはじめた。

「私をふくめて、新たに三人の仲間を得たと思ってください」

「三人ってことは……。もしかして、化学部の？」

「はい。それから、何が起きているのかは、琴宮さんから、かなり詳しい事情をお聞きしましたので、理解しているつもりです。もうすぐ純銀弾もできると思いますが……」

「な、なんだって!？」

人狼を倒すための最終兵器、銀の弾丸ができつつあると知って、思わず声が大きくなった浩一に、南方は人差し指をくちびるにあてて、たしなめた。

「しっ、声が大きいです。私たちの存在は、できれば横井先生には知られていないほうが、戦略的に有利ですから……。それより、はやく例のものを！」

浩一は、黙って例のもの、コルトのオートマチックを南方に手渡した。

「……あとは、私たちに任せてください」

南方は、東の間ものめずらしげに掌中のコルトを眺めていたが、ふと思いだしたように、それまで手に下げていたかりんの学生鞆を差し出した。

「それからこれ……」

「あれ、もしかしてこれ、かりんの？」

浩一は、ずっしりと重い鞆を受け取り、いぶかしげな表情で南方を見やった。

「はい。適当な入れ物が見つからなかったので、お借りしました。相原先生には詳しく説明しておきましたが、紺野さんなら中身を見れば使い方がわかると思います。もう少しだけ、もう少しだけ時間を稼いでください。お願いします。……では、私はこのへんで」

南方はそれだけ言うと、慎重に周囲を見まわして危険がないことを確かめ、足早に姿を消した。

それから程なくして、千鶴と相原が姿を現した。

エレベーター前に浩一たちの姿を認めた千鶴は、左手を腰にあてて胸をはり、おもむろに右手をつきだし、指を二本たてて言った。

「浩一、やったわ！ あたしの立てた作戦どおり、完全無欠の大勝利よ!!」

まるで、ヒーロー戦隊ものに夢中の、小さな子供のようにはしゃいでいる千鶴に対し、浩一はやや冷めた口調で言い返した。

「そういうセリフは、奴の息の根を完全に止めてから言えよな！」

「な、なによ、かわいくないわね。だいたい浩一は昔っから……」

「あー、うるさい、うるさい」

収拾のつかない姉弟げんかになりかけたそのとき、かりんがよこから間に入っ
て言った。

「あ、ほら、確かこのあとは地下に行くんじゃないかなかった？ とりあえずエレベーター呼んでおいたから、続きは乗ってからにしよう？」

かりんの言葉を受けてか、相原がくるつとふりむいて昇降ボタンに触れ、待機中だったエレベーターのドアを開いた。そして、まっさきに取り込むと、三人をふり返って、覇気たっぷりと言った。

「けんかをするだけの余裕があるんなら、きつと大丈夫よね。でも、これからは正念場なんだから、油断は禁物。気を引き締めていきましょう！」

隙間なく、ぴったりと閉ざされたドアの上に、到着までの時間と昇降深度を知るためのパネルがあり、赤い光を明滅させている。

降下中のエレベーター内という隔絶された閉鎖空間にいる今は、とりあえず横井から襲撃を受ける心配はない。それゆえか、四人とも緊張感から解放され、わりとリラックスした顔をしている。

浩一は、南方が持つてきたかりんの鞆を床の上に置き、しゃがみ込んで中身を
取りだしはじめた。

中に入っていたのは、薬品の類がほとんどだったが、どんな使い道があるのか、
ゴム風船や花火などが数個ほど混ざっている。

浩一は、薬品のラベルを一つひとつ丹念に確認していきながら、かりんとの会
話を再開した。

「ふーん、じゃあ、もしかしてあのスタンガンや催涙スプレーは……」

浩一に倣ってかりんもその場にしゃがみ込み、頭のベレーに手をやりながら答
えを返した。

「うん、南方さんの。ほら、あの娘かわいいし、もの静かでおとなしそうに見え
るから、けっこう痴漢とかに遭いやすいタイプなのかも……。わたしは歩いて学
校行ってるから、そういうのって経験したことないけど、電車通学してると、そ
ういう目に遭うこともあるみたい」

「なるほど……」

納得しかけた浩一に、待ったをかけたのは相原だった。

「あれ？ 南方さんって、たしか、家がすぐ近くだから自転車で通学してたはず
よ。何度か自転車置き場で会ったことあるもの」

「え、じゃあ、あのスタンガンや催涙スプレーって、いったい……」

小首を傾げ、考え込むかりんに、千鶴は、茶目つけたつぶりの推論を披露して
くれた。

「案外、化学部の男子たちを警戒して、用心のために持つてたとか？」

「あは、あははは……」

かりんが乾いた笑い声を上げる。

相原も、つられるように笑みをもらした。が、急に真顔になり、すっと浩一の
隣にしゃがみ込んで、つぶやいた。

「美香も南方さんを見習って、そういうの持ち歩いたほうがいいのかな」

浩一の顔をのぞき込むようにして、相原は言葉をつづける。

「だれとは言わないけど、今日だってあやうくキスされそうになっちゃったし……」

「……」

「え？」

かりんが相原の言わんとすることを完全に理解するまで、さして時間はかからなかった。

「いっぽう浩一は、相原の唐突な暴露劇にあわてまくることとなった。かりんと視線があわないうよう、薬品名を意味もなく読み上げはじめる。」

「えっと、これは……。なになに、硝酸アンモニウム？ こっちは、水素化カルシウムか……」

「浩ちゃん！」

ぱつと立ち上がり、怒りに声をふるわせるかりん。

さすがに、これ以上無視するのはまずいと思ったのか、浩一はそろそろと顔を上げ、言った。

「ま、待て、話せば、話せばわかる！」

「なに『犬養毅』みたいなこと言ってるのよ！ だいたい、どうして浩ちゃんが相原先生とふたりつきりで、学校にいるわけ？」

かりんの鋭い追及にたじたとになりながら、浩一はいかにもぱつが悪そうに答えた。

「その、追試つてやつで……」

「ふーん、そう。それで？」

「だから……」

弁解に必死の浩一を尻目に、相原はペロツと舌をだし、千鶴に向かってささやいた。

「あは、ほんとに美香のほづが悪いんだけどね。ちょっと、いじわるしすぎたかな……」

相原から、事の真相なるものを聞いている千鶴のすぐ後ろでは、今まさに、かりんの飛び蹴りが、浩一に決まろうとしているところだった。

「かりんスペシャル、問答無用のハイパースパイラルきいっく！」

「はうっ」

地下深度三七〇メートルほどのところに、底面積が約六万二〇〇〇平方メートル、天井までの高さが一〇〇メートルにも及ぶ、広大な空間がある。むろん自然にできたものではなく、人工的に造りだされたものだ。

この地下空間は、校舎の真下の部分で北と南にわかれてい、その北側には二階建ての体育館と地下水利用の温水プール、大講堂などがあり、南側は多目的運動場となっていて、下が土のグラウンドだ。

壁はCFRC（炭素繊維強化コンクリート）製で、パステルグリーンの塗装が施されている。

照明はかなり明るく、それなりの電力を消費するが、地下水の流れを利用した自家発電装置のおかげで、問題にはなっていないようだ。

グラウンドが地下にあることのメリットとしては、降雨の心配がいらぬなど、天候に左右されないということのほか、年間を通じて温度、湿度、ともにほぼ一定なので、非常に快適ということがある。夏は涼しく、冬は暖かい。まさに、スポーツをするには最高の環境であると言えただろう。

地下の運動場に出るには、校舎中央の大型エレベーターを利用する。

定員九十名の昇降機が計八機あるので、全校生徒が集合するような場合でも、さほど時間は掛からない。また、校内にあるもののほかに、ふだんは使われることのない非常用エレベーターが、校舎から池を挟んでちょうど対岸にあり、それを利用すると、グラウンドの南側に出ることができる。

浩一と相原のふたりは今、グラウンドから非常用エレベーターへと通じている、奥行き約三十メートルの通路の入り口に立っていた。

その通路は、幅が四メートル、天井までの高さが三メートルを若干超える程度。照明は天井に直接埋め込んであり、正五角形の頂点に、それぞれひとつのスポットが配置され、その正五角形をひとつの単位として、三メートル間隔で床を照らしだしている。

最奥まで行きつくと、そこは天井の高い小空間となる。

正面のエレベーター右脇にある扉は、非常階段のある階段室へとつづいているのだが、今はまったくその用をなさなくなっていた。文化祭のときに使用したまま、きちんと片づけなかった折り畳み式の長机が、山と積んであったからだ。

浩一は、ふだんほとんど利用することのないその通路をあらためて見まわしたあと、天井にあるはずの何かを探し、視線をななめ上に向けたまま、奥へ奥へと歩いていった。

「先生、うちのは……たしか、熱感知型だったよね？」

浩一は、天井に埋め込まれている火災警報用の熱感知機とおぼしきものを仰ぎ見ながら、背中の相原に向かってそうたずねた。

「え？ ええ……」

「なら、問題ないな。……じゃ、先生、そろそろ始めようか」

「そうね」

ふたりはこくと頷きあい、罨の設置というきわめて危険度の高い仕事に取りかかった。

かりんと千鶴のふたりは、自分たちの所属している日本武道部の部室 正確にはその女子更衣室にいた。

自分のロッカーの前に立ち、中をひつかきまわして必要な物を探していた千鶴だが、ふと、何かを思いだしたかのように背後のかりんをふり返り、たずねた。

「ねえ、かりんちゃん、ちょっと訊いてもいい？」

「え、なあに？」

三指用の弓懸（弓に矢をつがえて射るとき、弓弦で指を傷つけないよう保護するための革の手袋）を右手にはめながら、かりんは応じる。

ほんのわずかに躊躇したあと、千鶴は、いきなり質問の核心に迫った。

「うん、あの拳銃……どこで手に入れたの？」

「……………」

千鶴の問いに、一瞬かりんの動きが止まる。

「あ、ごめん。よけいな詮索……だよ。だれにだって、答えられない、答えたくないことのひとつやふたつあるし、無理に訊かないから……」

かりんはやや間をおいて頭の中を整理し、千鶴の問いに答えられる範囲で答えはじめた。

「…… ネットで知りあった娘に、破格の値段で譲ってもらったの」

「 ネットで知りあった友だち？」

「うん。わたしも直接会ったのは二回しかないから、その娘の素性とか、どうして拳銃なんか持ってたのかとか、詳しいことは知らないんだけど……。なんか姉御肌で、見かけによらずやさしそう。名前は、絶対だれにも言わないって約束だから、教えられないけど……。ごめんね、ちいちゃん」

「ううん。でも……」

「でも？」

「うん、お金さえだせば、日本で手に入らないものはないっていうけど、ほんただったのね……」

「うん、そうだね……って、わたし、それについてはコメントできる立場じゃないかも」

千鶴がくすつと笑みを浮かべる。

「いいの、いいの。大悪を倒すための小悪は、これ大善なり……ってね。おじいちゃんがよく言ってたわ」

「ふうん、そういう考え方もあるんだ」

「そ。だから、今度ばかりは、かりんちゃんのメール友だちに感謝しなきゃね」

ふたりとも弓懸ゆかけをつけ、制服の上に数本の矢が入った筒状の入れ物、矢筒を背負っている。弓道における矢筒とは、本来自分専用の矢を弓道場などに携帯するとき、もちいるもので、これを背負ったまま的を射るようなことはしないのだが、今は非常事態なのでこまかいことは気にしてられない。

先に支度したくを整え終わったかりんが、千鶴をふり返ってたずねた。

「ちいちゃん、そろそろ準備できた？」

千鶴は、傍わきに立てかけてあった弓を手に取り、弦つるをかるく素引すびいて張力を確かめ、親指こしたを上げて応えた。

「うん、バツチリ！」

「じゃ、そろそろ行こっか」

部屋を出でようと、かりんは弓を左手に持ち替かえ、ドアのノブに手をのばした。だが、そこで急に身体からだを硬直させ、顔をしかめた。

「かりんちゃん、どうかした？」

そう千鶴に訊きかれ、かりんはチラッと、バンダナの巻きつけてある右腕の上腕部に目をやった。が、すぐに首を横に振って、背中せなかの千鶴をふりむき、言った。

「う、ううん、なんでもない。ちょっと静電気でビリツときただけ……」

「静電気があ、もうすぐ冬だもんね」

「……うん。さっ、行こう！」

部室を後にしたふたりは、浩一たちと合流するべく、風となって駆けだした。

非常用エレベーターへと通じている通路のほぼ中央。熱感知型と思われるセンサーのほぼ真下に、いくつもの長机がまるでバリケードのように組んで置いてある。そのかげに隠れるようにして、水の入った青い風船がふたつ、多少の距離を置いて鎮座している。あたりの床には、一面に白っぽい粉末。水素化カルシウム及び水素化アルミニウムリチウムが撒かれていたのだが、土埃にうまくまぎれさせて目立たないようにしてあった。

浩一は、灯油の入った瓶からピンセットを使って取りだした金属カリウムを、水入り風船のそばにそっと配置し、額の汗を拭った。

仕掛けた罫は、横倒しにした長机で目隠しされ、グラウンドの側からは完全に見えなくなるよう、うまく工夫されている。

「先生、そっちの方はどうなってる？」

浩一はそう言いつつ、すぐ後ろにいるはずの相原をふり返った。

相原は、導火線が飛び出し、中に何やら入っているガラス瓶の上に、ブリキのバケツを逆さまにして被せているところだった。

「こっちも、もう終わり……」

そう言ったあと、ぱつと立ち上がり、浩一をふり返って親指を立てる。

「トラップメイキング完了っ！」

浩一も相原に伝えるかたちで、腕を前につきだし、親指を立てた。

「先生もけっこうやるじゃん」

「紺野くんこそ！」

「あとは、かりんたちが弓矢を持ってきてくれるのを待つばかり、か……」

水の入った風船を矢で射抜くことではじめて罫は作動する。全員がエレベーターに乗り込み、扉が閉まるぎりぎりのタイミングで矢を放てば、仕掛けた罫に巻き込まれることなく、横井だけにダメージを与えられるはずだった。

浩一は、腕の時計に目をやった。ふたてに分かれてから、かなりの時間が経過している。

相原も、浩一につられるように時刻を確認し、眉をくもらせた。

「たしかに、ちょっと時間が掛かりすぎてるわね……。紺野くん？」

どうする？ 迎えに行く？

そんなニュアンスのこもったまなざしで、浩一の顔をじっと見つめ、問かける相原。

「おれが行く」

「……じゃあ、まかせたわ。美香はここで待つてるから、気をつけてね」

「ん」

浩一は、誤って畏を作動させないように、慎重に机の脇をすり抜け、走りだした。

「かりんちゃん、しっかりして！ かりんちゃん！」

「う……あつ……」

かりんは、自身のからだを抱きしめるようにして膝をつき、がたがたと震えている。

千鶴の言葉に、答えたくてもこたえられないのだろう。なにか言おうと口をひらきかけたが、すぐにぎゅっと目を閉じ、躰を折った。

今、ふたりがいるのは、校舎のちょうど真下にあたる部分。目の前には、大型エレベーターが並んでいる。

もちろん、ふたりともこんな場所で足を止めるつもりなど毛頭なかったにちがいない。だが、千鶴より、やや先行していたかりんが、突然バンダナを巻きつけているほうの腕を押さえて立ち止まり、その場にうずくまってしまったのだ。

異常に気づいた千鶴が弓を放りだし、あわててかりんにかけよってから、一分近くがすぎ、現在に至っている。

「うっ……あうっ……あつ、ああつ……はあ、はあ、はあ……」

「かりんちゃん、腕の傷、痛むの？ もしかして、感染症か何か起こしたのかも。一度地上に上がって、保健室できちんと手当てしなきゃ……」

「へ、いき……だい、じょうぶ、だから、ちいちゃん、先に……行って……」

「な、なに言ってるのよ、かりんちゃんを置いて行けるわけ、ないじゃない！」

千鶴は、畏が仕掛けてあるはずの合流地点まで、今の状態のかりんをとめない強行するのは無理だと判断し、身を隠せそうな場所を探しにかかった。

「とにかく、こんな目立つところにいたんじゃまずいわ。どっかにかくれなきゃ……」

しかし、人間ふたりが完全に身を潜めることのできるような、セーフティ・スポットなど、どこにも見つからなかった。

まずい、まずすぎるわ……。

千鶴は内心、恐々としながら、自身から見て左側に位置するエレベーターを、ちらつと盗み見た。

かりんはまだ気づいていないようだが、八機あるエレベーターのうちの一機が、降下してきていたのだ。

「かりんちゃん、肩を貸すから、なんとか頑張っ立ってみて？ そしたらエレベーターまですぐだから、いったん地上まで……」

横井とすれ違いに地上に上がってしまえば、それなりの時間は稼げる。そのあと、どうするのかということは、そのときになってから考えればいい……。千鶴にしては、めずらしく、冷静かつ論理的な思考で、正解と思える行動をとろうとした、そのとき。

「ふたりとも、無事か？」

「浩一！」

グラウンドのほうから駆け寄ってくる浩一を認め、千鶴は思わず立ち上がった。浩一は、そばまでくるなり、すぐにかりんの様子がふつうではないことに気がついた。

「かりん、どうしたんだ？」

心配そうな表情で傍らに膝をつき、その顔をのぞき込む。

「……あ、浩……ちゃん」

「腕の傷……か？」

「う、ううん、腕のほうは……それほどでも……ないの……。ほんのちょっと、気分が悪くなっただけ……。もう、だいじょうぶ」

かりんの頬にわずかながら赤みがさし、呼吸もいくぶん落ちついてきたようにみえる。あるいは浩一が来てくれたことで、精神的に楽になったのかもかもしれない。やや時を置いたのち、かりんは浩一の腕にすぎるようにして、なんとか立ち上がった。が、立っているのがやっとといった感じで、今すぐ走れそうな状態になり、いことは明らかだった。

千鶴は、意を決して言った。

「浩一、かりんちゃんをおねがい。あたしが弓であいつを足止めするから、そのすきに……」

「なに？ どういうことだ？」

千鶴は矢筒から矢を取りだし、弓につがえながら早口で答えた。

「急いで、時間がないの。エレベーターが一機、降りてきてるのよ！ 早く!!」

「ちっ……」

浩一が舌打ちしたのとほぼ同時に、エレベーターの到着を知らせるチャイムが鳴り、ドアが開きはじめた。

次の瞬間、咆哮と共に人狼横井が飛びだしてきた。千鶴は、躊躇うことなく弓をひき、弦をはじいた。

千鶴の放った矢は、みごとに人狼の眼窩を射抜いていたが、その動きを封じるほどのダメージを与えることは出来なかったようだ。

「また貴様かあああつ!!」

先程、硫酸を浴びせかけられたことを横井は忘れてはいなかった。怒りと狂気の入り混じった貌で、まっすぐ、千鶴めがけて突進してくる。

あせった千鶴は、いつものように矢継ぎがうまくいかず、二の矢を射かけることができない。

「ちいちゃん!」

かりんが絶叫する。

剛毛の生えた獣の右腕が、千鶴の側頭部を薙ぎ払う寸前、浩一が横合いから人狼横井に体当たりをし、それを阻止した。

一瞬、恐怖のために竦み上がってしまい、動きの止まった千鶴だったが、すぐに気を取りなおし、横井ともつれ合っている浩一に向かって叫んだ。

「浩一、離れて!」

千鶴の声に反応し、浩一はすかさず身を起こして真横に跳んだ。

その浩一をめがけて飛びかかろうと、軀を起こした人狼横井の首筋に、二の矢の水破が突き刺さった。急所を射抜かれ、さしもの人狼も動きが鈍る。

千鶴は、すぐに次の矢をつがえて弓を引き絞り、狙いをつけた。

「浩一、はやく、かりんちゃんを……」

横井から視線を外さずにその動きを牽制しつつ、浩一をうながす。

かりんのもとへ駆けつけた浩一は、地面に置かれていた矢筒を手に持たせ、耳もとで囁いた。

「かりん、あばれるなよ……」

「え!？」

浩一は、かりんの驚きを無視してその腕に抱き上げ、走りだした。

首筋に刺さった矢を引き抜き、横井が立ち上がるうとする。だが、千鶴の射かけた三本目の矢がその動きを封じた。

千鶴はそれを見届けてから身をひるがえし、落ちていたかりんの弓をひろってふたりの後を追った。

かりんを抱いて走っているため、浩一の足はそれほど速くはない。千鶴はすぐに追いつくことができた。

「浩一、熱血ね!」

横にならんで走りながら、千鶴が言う。

浩一は、千鶴に一瞥をくれただけで何も言わなかった。あるいは千鶴の冷やかに応えるだけの余裕がなかったのかもしれない。

グラウンドを走破し、非常用エレベーターへの連絡通路まで、あとわずかとせまったところで、浩一が必要最小限の言葉で千鶴に情報をうながした。

「奴は?」

浩一の言葉を受け、千鶴は肩越しに後方をふり返った。

横井は軀から引き抜いた矢を手にしたまま、グラウンドに現れたところだった。「追ってくるわ。距離は、かなりあるけど……」

「何よ、あれ!? 通れないじゃない!」

行く手を阻む机の山を目にして、千鶴はパニック寸前の声で叫んだ。

どう考えても、誤って罠を発動させないよう、机と壁の隙間をそろそろと通り抜けているような時間的余裕はなかったからだ。

「浩一、間に合わないわ! このままじゃ、追いつかれちゃう!」

浩一は、バリケードの手前でかりんを地面に下ろし、かりんの持っていた矢筒から矢を一本引き抜いた。そして、千鶴が手にしていた弓のうちの片方を強引に奪い取り、言った。

「ここはおれに任せろ！ ふたりは、先にエレベーターに乗って待機してるんだ。いいなっ！」

千鶴もかりんも、浩一の言葉に、一瞬、どうするべきか躊躇したが、近づいてくる横井の足音が、決断をうながした。

浩一は、すばやく矢をつがえて弓を引き、振り向きざまに弦を弾いた。

矢は人狼の脇腹に突き立った。瞬間、喉の奥から、くぐもった短い唸りが発せられた。だが、それだけだった。まったく何のダメージも与えることができなかったのだ。

「この怪物があっつ！」

「死ねいっつ！」

人狼横井が吼え、浩一の数歩手前で地を蹴り、拳をくりだしてきた。

浩一はとつさに、手にしていた弓をくるつと回転させ、右手を添えて防御に専念した。

横井の拳は、いったん弦にあたって力をそがれ、弓の握り 籐の巻かれた矢摺りの部分に命中した。弓は衝撃に耐えきれず折れてしまったが、そのおかげで力をかなり相殺することができた。が、それでもなお、浩一の躰は後方に弾き飛ばされ、組み上げてあった机に叩きつけられた。

「ぐっ……」

上のほうに積み重ねられていた机が、ぐらつと傾いた。もし、そのまま、水入り風船の上にも落ちれば、すべては終わりである。しかし、横井の攻撃は止まらない。もう一度、正面からの突き とみせて中段の回し蹴りにきた。

後ろに下がれない浩一は、折れた弓を捨て、肘でガードしながら前に出た。打撃を受けた瞬間、ミシツという骨のきしむような音がして、浩一の躰がふわっと宙に浮き上がった。蹴りのエネルギーを一步踏み込むことで半減させていなければ、まちがいなく腕をへし折られていただろう。

浩一はたまらず、右側に跳び、壁を背にして体勢をととのえようとした。しかし、横井がそれを許すはずもない。

顔を狙って放たれた、横井の左の拳を、首を捻ることで辛うじてかわす。

剛拳が炸裂し、その衝撃は、壁に背をつけていた、浩一の躰の中を波となって突き抜けた。

防戦一方、もはや浩一には、為すすべがなかった。

横井の拳が、ゆっくりと壁から離れる。それにともない、剥離したコンクリートの破片が、パラパラとこぼれ落ちた。

「なかなか筋がいい。今、此処で殺してしまうのは惜しいくらいだ。だが……」
横井は言いながら、脇腹に刺さっていた矢を引き抜いていく。

浩一は動けなかった。横井には一分の隙もない。額から、冷たい汗が糸のように流れた。

横井の右手がわずかに動き、折り曲げられた指が数本、第一関節のあたりでぽきぽきと音をたてた。そして、その獣の右手が、浩一の顔面を鷲掴みにしようとした、そのとき。

ひゅんという弓音と共に、組み上げてある机の間を縫って、かりんの放った神速の矢が飛来。気配にふりむいた横井だが、時すでに遅く、矢は頸椎のあたりに突き刺さっていた。

「浩ちゃん！」

かりんの声が、浩一の縛を解き放った。

「せいっ！」

浩一は、横井の頭を掴んで引き落とすと同時に膝を突き上げた。

獣の顎が上がったところに、気合いの入った正拳を叩き込む。結果、横井は反対側の壁まで吹き飛んだ。

「浩一、早く！」

「わかつてる！」

浩一は急かす千鶴に短く答え、慎重かつ、できうるかぎりのスピードで、組み上げられた机と壁の隙間を通り抜けた。

エレベーターまで、あと十五メートルあまり。全力で走れば数秒でたどりつける距離だ。

「みんな無事ね！」

そのとき、通路にこだましたのは、エレベーターを待機させ、その前で、はらはらしながらまっていた相原の声だった。

しかし、その声が、こだまとなってまだ通路に残っているうちに、かりんたちのすぐ後ろで派手な音がした。横井が机の山を崩壊させたのだ。

はっとして、思わずふり返ろうとした千鶴とかりんに、浩一の声が飛ぶ。
「振り向くな、走れっ！」

浩一に手を引かれ、かりんはあわてて駆けだした。
千鶴もふたりのすぐ後につづく。

積み上げてあった机が落下し、水入り風船が破裂。ほとんどタイムラグゼロで金属カリウムが発火。そして、そのあたりに撒かれていた水素化カルシウム及び水素化アルミニウムリチウムが、水と反応して水素を発生させ、鉄をも溶かす爆炎が巻き起こった。

「ちっ、ござかしい真似を！」

首から矢を引き抜き、横井が吐き捨てるように呟いた。

その直後。

天井に備えつけてあったセンサーが、炎の熱を感知して警報機が鳴り響くと同じ時に、スプリンクラーから大量の水が噴き出し、比較的広範囲に撒かれていた残りの薬品と反応。通路はまさに炎の海と化した。

浩一たちは、背中に灼きつくような熱さを感じつつも、間一髪、爆炎にのみこまれることなく、ホールまでたどりつくことができた。

だが、危機はまだ去ったわけではない。

相原が仕掛けた罠　ニトロセルロースと硝酸アンモニウムを使った混合爆薬の導火線に、今、火がついたからだ。

相原がタイミングを見計らってセンサーボタンから手を離し、浩一、かりん、千鶴が、閉まりはじめたドアの隙間からエレベーター内へと転がり込んだ。

しかし。

「な、なんで？」

焦燥と苛立ちの入り混じった顔で、千鶴が問いかける。ドアが完全に閉じきる寸前、まるで、目に見えない障害物にでも当たったかのように、音をたてて停止したからだ。

ドアがふたたび開きはじめてのを見て、相原があわててボタンに触れる。しかし、いったん開ききったドアが、ふたたび動きだすことはなかった。

浩一は、はっとして目を見ひらいた。

「ま、まさか……」

「浩ちゃん、あいつがまた結界を張ったんじゃ……」
 かりんはそう言いつつ、ドアの開閉するあたりの空間に手をのばした。
 その動きが凍りつく。

誰もが認めたくない不可視の悪夢がそこにあった。

「そう簡単に、逃がすと思うか？」

炎に包まれた通路から、エレベーター前のホールに現れたのは、人狼横井である。

「くっ、ちくしょう！」

浩一は、ぎりつと奥歯をかみしめ、拳を見えない壁に叩きつけた。

「紺野くん、もう時間が……」

「みんな、伏せるんだ！」

浩一は、そう叫ぶと同時に呆然としていたかりんを押し倒し、その上に覆いかぶさった。

刹那。

最後の罾が発動した。

高熱をともなつた衝撃波が、狂える火龍となつて横井を呑み込み、エレベーター内の四人に襲いかかった。

静寂がすべてを支配していた。

通路を覆っていた炎は、爆風に吹き消されたのか、あるいは、薬品の反応が終わったのか、ほぼ鎮火していた。警報機もすでに鳴り止んでいる。

爆発の起こったあたりには、破壊された机の残骸が転がっているはずなのだが、付近の照明も一緒にやられているため、薄暗くてよくは見えない。

「う……!？」

浩一は、かりんがわずかに身じろぎしたことによって現実を引き戻され、急いで躰を起こした。ついで、かりんが上半身を起こし、きよろきよろとあたりを見まわす。

かりんのすぐ側で頭を抱え、しゃがみ込んでいた千鶴も、恐るおそる顔を上げる。

ドアの外に、横井の姿はなかった。

おそらく爆風に吹き飛ばされ、エレベーター内からは見えない死角の位置にでも倒れているのだろう。

「紺野くん……」

操作パネルの下にうずくまったまま、相原が不思議そうな顔で訊いてくる。

「どうして、美香たち無事だったの？」

浩一は、外がひどい有様だったにもかかわらず、エレベーター内は、爆発の衝撃を受けた跡がまるでなかったことから、唯一、考えられることを口にした。

「たぶん、奴が張った結界のせいだと思う。あれが逆に、おれたちを守る障壁になっただんだ」

納得がいったという表情で、相原がうなずいた。

「そんなことより、先生」

「え？」

「このエレベーター、まだ生きてるみたいだから、早くドアを閉めて地上に」

「そ、そうね……」

相原は、そう答えてボタンに触れる。

浩一の言葉どおり、エレベーターは正常に機能していたようだ。すぐに反応があり、ドアは閉まりはじめた。

上昇に転じたエレベーターの中で、四人はほぼ同時に大きく息を吐きだした。

人狼横井は目を覚ました。

そこが、非常用エレベーターへと続く通路の片隅なのだ気づくまでに、十数秒を要した。

軀が重かった。

満月のその日に、これほどの疲労を感じたことは、いまだかつて経験したことがなかった。

横井の目と鼻の先に、転がっているものがあった。

横井は見るとはなく、それを眺めつけ、不意にそれが何であるかを理解した。かりんが所持していたはずのスタンガンである。おそらく、逃げる途中に何かのはずみで落としてしまったのだろう。

横井は、ふとすべてを思いだした。

何故、自分がこんな床の上に這いつくばっているのか、何故、これほどの疲労を不死身ともいえる自身の肉体が感じているのか、そのすべてを。

歪んだ笑いをその獣面に張り付かせたまま、横井は立ち上がるうとし、動きを止めた。

その視線は、つい今し方まで見るとはなくみていた、煤けたスタンガンの上で固まっている。

「……そういう事か」

横井はひとり呟いた。

スタンガンのグリップには、ホログラムタイプの顔写真シールが貼りつけられていて、その真の持ち主が誰なのかを暗に告げていた。

人狼は、幽鬼のように立ち上がった。